

海音寺潮五郎

真田幸村

上



六興出版

真田幸村
上

真田幸村
(上)

昭和五十八年九月二十日 第一刷
昭和六十一年八月三十日 第五刷

著者 海音寺潮五郎

發行者 賀來壽一

發行所 株式會社 六興出版

東京都文京区水道二ノ九ノ二
電話東京(943)三四三二(代表)
振替 東京 一ノ九二四四八番

印刷 三秀會
表紙 半七寫真
製本 明泉堂

真田幸村(上)目次

春の遠乗り	11
そぎ尼	18
辻 棲	25
お松ご料人	33
亡国の足音	40
深夜の密使	47
軍 議	54
残党狩	61

不思議な道具を使う少年	68
赤吉という少年	75
千曲川の鯉	83
名家の滅亡	90
赤吉仕官	97
戦国という時代	105
峡谷の長城	113
人の世の礼儀	120
父の背信	127
機略	135
透ッ波の大將	142

血の呼び声	149
内と外、上と下	156
河童さわぎ	164
上きげん	171
白鳥明神	178
天狗さわぎ	185
明神の感応	192
海老韃卷の刀	200
読みの深さ	208
血臭い飯	216
黒い山蟻	223

春の遠乗り

一

天正十年の二月一日は、太陽暦では三月五日である。その数日前、つまり陰暦正月二十七日、八日、陽暦三月一、二日だ、正午少し前のことであつた。甲府の西南郊を流れて、末は笛吹川に合する荒川の堤の上に、一人の騎馬の武士があらわれた。浅黒いおも長な顔がいかに健康げな血色にみち、きれながでややまなじりの切れ上った澄んだ目と、ひきしまつた目鼻立ちとが、俊秀な感じであつた。年はまだ若く、十七、八と見えた。綾蘭笠をかぶり、鹿の皮のむかばきをはいた遠乗り姿で、どう見てもかなりな身分と見えるのだが、従者を二人しか連れていない。一人は馬丁だ。これは錢つなぎの紋様が背中と胸をとおして両袖の端までぬいている紺の筒袖の着物に四布ばかまをはいている。

一人は供侍だ。これはやはり錢つなぎの紋様のついた柿色の小袖に、同じ色のはかまをはいているが、そのはかまの裾をぐんとたくし上げ、黒いむくむく生えたたくましい足を股のあたりから見せて、はだしの足を泥にまみれさせている。

この季節になると、寒い甲州盆地も、風のない晴れた日はあたたかい。武士はいかにも気持よさそうに、狐色の枯葉が深々と蔽うている堤の上をゆつくりと馬を打たせていたが、やがて馬をとめておりた。

「このへんがよからう」

といって、馬丁に手綱を渡した。

「遠くへ行かぬようにしておいて、そちも休むがよい」

「ねい」

馬丁は少し離れた、とりわけ草のよく密生した場所に馬を連れて行き、先ず鞍についたふくろをおろし、つづいて鞍をおろして、前脚をしばって馬を追いはなし、その近くに腰をおろして長々と足をのばした。

一方、武士は駆けよって来た供侍に鞭をわたし、ふと笠のふちを上げて日ざしを仰いだが、

「どうやら、時分どきのようだな。食事をしよう。支度してくれるよう」

といった。

供侍は馬丁のところに走り、鞍といっしょにおいてある袋をとって来た。袋の口をひらくと、むすびが出て来た。赤んぼの頭ほどの大きなむすびが、ものを書いた反古ほうぐにくるまれて、風呂敷ふろしき包みになっている。五つもあった。

武士は馬丁を呼びよせ、侍に一つ、馬丁に一つ手渡し、自分も一つを食べはじめた。玄米くろじめのむすびは粘着力がなく、ともすればぼろぼろと粒がこぼれたが、武士はこぼればひろい、こぼればひろいしながら、一粒も捨てず、実においしそうに食べた。

食べおわると、従者らに、

「のこりはしまっておけ」

といって、堤を川原におり、ごろごろと石のころがっている上をわたって流れまで行き、瀬音を立てて流れている水で丹念に両手を洗った後、水をすくって口にふくんだ。がらがらと口をすすいでは吐き出し、すすいでは吐き出してから、最後にうまげにのんで、帰

って来た。

その間に、従者らは飯を食べおえ、のこったむすびを袋におさめていた。

「あちらに行っているがよい。書見のじやまにならぬよう、あまり声高にしゃべってはならん」

武士は言って、ふところから書物を出してひろげた。読みかけの書物であろう、二三丁ページをめくりかえしていたが、すぐ読みつぎのところをさがしあてたらしく、熱心なおももちになった。

従者二人は、馬を追いはなしてある場所に行き、腰をおろして、ひそひそと語りはじめた。時々話をやめては、のび上るようにして、田圃たんぼや樹林や小さな沼の散らばっている田野でんやの向うに家なみのかたまっている甲府の町はずれの部落の方に目を放った。人待ち顔に見えた。

武士はそれをふり向きもせず、専心に書物に目をさらししている。ちょうど南中なんちゆうの日はぼかぼかと照りつけ、武士のまわりの枯草の上からかげろうがいく筋もゆらめき立っていた。

およそ一時間もたった頃、甲府の方角の田野のはて

に、騎馬の武士があらわれ、真直ぐにこちらに飛ばして来るのが見えた。かぶっている陣笠が時々日を反射して光った。侍は小手をかざして見ていたが、

「申し上げます。望月殿もちづきの姿が見えました」

と、武士に言った。

武士はからだをねじ向け、侍の指さす方に目をむけ、凝視していたが、

「うむ」

とうなずいただけで、また書物にかえった。

騎馬武士がこちらに向って二町ほど近づいて来た頃、また一騎見えた。

「江原殿もまいられます」

と侍はまた呼ばわった。

「うむ、うむ」

と言っただけで、武士はもうふりかえって見ようとはしなかった。

やがて、先きに立った武士は堤の下に馬を乗りつけると、下乗し、口綱をとり、ひたいの汗を袖でふきふき、堤を上って来た。やや肥満して、色白なふっくらとした顔が、いかにも血色のよい二十四、五の青年だ。

気楽で、潤かつた達な性質なのかも知れない。襟もとが少しはだけで、真黒な毛がかたまつたように真中に生えている白い胸が見えていた。

「暑い、暑い。もうすつかり春じゃなあ」

といって、堤の上に馬を受取ろうとして待ちかまえている馬丁に言った。

「望月様は肥っておられますので、お暑いのでございましょう。手前どもはちようどよい氣候で」

馬丁は笑いながら言つて、口綱を受取つた。

「そうじゃろうのう。汗がぼろぼろ、ぼろぼろ出て、かなわんわい」

望月と呼ばれる武士は、袖をまるめて、グイグイとひたいをこすり、ついでに胸までこすつて、もうその時は書物をふところにしてしまつて待ちかまえている武士の方に近づいて来た。

「唯今でございました」

二間ほどの距離で立ちどまり、うやうやしくおじぎして、側によつてひざまずき、両手をついた。

「大儀であつたな。もそつと側へよれ」

と、ずつと近づけて、声をひそめた。

「うまく聞き出せたか」

「三軒ほどまわって、それなかなか離れた場所をえらんで、聞いてまいりました。恐れながら、お耳を拝借」

望月は武士の耳に口を寄せて、ぼそぼそとささやいた。

この間に、第二の騎馬武士も到着して、堤の上に来、馬を馬丁にあずけたが、遠慮して上りついたところになんて待っていた。

望月のささやくのを、武士はうなずいて聞いていたが、相手の話がおわると、小声で二つ三つ聞き返して、「よくわかった。退れ。^{さぶ}大儀であった」

とねぎらって退らせた。

望月は下の河原へおりて行き、さつき主人が口をすすいだ場所に行き、ごしごしと顔を洗い、口をすすぎ、水をのんだ。四つんばいになって流れに口をつけ、うまそうにごく多量にのむ。

その間に、待っていた武士、江原は主人に呼び寄せられ、望月と同じようにして報告した。これは瘦せて小柄で、おそろしく色が黒く、まるい目がきらきらと

光って、いかにもすばしっこそうな若者であった。年頃は十八、九と見えたが、それは小柄であるせいで、案外二十二、三になるのかも知れない。まるい目をくるくるさせながら主人の耳に口をよせてささやいているところ、小猿が飼主の耳を嗅いでいるような趣きがあった。

「うむ、うむ、うむ」

主人はうなずいて聞きおわり、ねぎらって遠ざけようとしたが、水をのみおわって川原から上って来る望月を見ると、ちょっと待て、と、江原を呼びとめ、

「字太、字太」

と呼んだ。

「はっ」

望月はまだ濡れて真赤な分厚い唇をぐいと袖で拭いて、小走りに堤を上って来て、ひざまずいている江原にならんでひざまずいた。

主人は先っきの袋からむすびを出して、二人に一つずつ渡した。

「腹が空いたろう。食え」

二人はおしいただき、それぞれに持って、侍と馬丁

のところに行き、足を投げ出し、にぎやかに談笑しながら食べはじめた。

主人はひとり日に向ってすわりつづけていた。その目は小半町向うを流れる荒川の瀬に向けられたまま動かない。日を反射してきらきらと光りながら流れる瀬は、春のよろこびにおどっているかと思われるほどに軽快で、よろこびにあふれているようであったが、凝視している人の表情は次第に憂鬱げなものになって行った。それは若々しい顔に似合わない暗いものであった。

二

一時間ほど立つと、この季節のくせで、日ざしが薄赤くなり、ややつめたい風がそよぎ出し、川原の枯草がさびしい音を立てて鳴りはじめた。

主人は従者らを呼んだ。

「そろそろ帰ろうか。しかし、もう一度古府のお城下を見て、それから帰ることにしよう。急がんと暗くなるぞ」

主人の顔には、もう憂鬱げなものはない。年相応に

明るくさわやかであった。

主人は従者らのひいて来た馬に身軽に飛びのり、軽快な騎乗ぶりで堤を平地の道に出ると、少しずつ馬の歩度を上げ、ついに速歩になった。望月と江原の馬があとにつづき、そのあとから侍と馬丁とが足を飛ばして追いかけた。

現在甲府といっている町は、豊臣時代末期に浅野長政が甲斐領主であった頃にひらいたので、武田氏全盛の時代の甲府は、現在の甲府の北方の古府中といっているあたりを中心にした城下町がひらけていた。現在では甲府市がおそろしく広範囲になっているから、これも甲府市内になっているが、以前は市外になっていた。その昔の甲府市から北二キロばかりにある躰躰が崎山の西方の平地に、躰躰が崎山と相對して、武田氏代々の居城躰躰が崎城があり、それを北、西、南の三面からとりまくようにして、武家屋敷がならんで、城下町を形成していたのである。

躰躰が崎城を最初に築いたのは、信玄の父信虎であった。信虎は暴悪な人であったと伝えられているが、武勇武略には卓越していて、それまでは今の甲府の東

方六キロばかりの石和^{いさわ}が代々の武田氏の居所であつたのに、ここに住いをうつし、国内の豪族らを全部切り従え、甲斐一国をその有にした。

信虎が躑躅^{つしゆ}方崎に城をきずいたのは永正十六年であつたというが、その後信玄の一代を経、勝頼の代となつて去年十二月まで、三代六十二年の間、武田氏の本城であつたのだ。

躑躅^{つしゆ}方崎城は、城というより館^{やかた}といった方が適當なかまであつた。ある場所は天然の要害の全然ない平地だし、四方に濠^{ほり}とこの時代のことばで掻き上げと称する土を盛り上げて芝を生えこんだ堤とをめぐらしたにすぎないものであつた。この少し前から近畿地方にはじまつて恐ろしい勢いで全国にひろがりつつある、巨岩大石をもつて石垣を築き、屋根と銃眼をもつた白いしつくい塀^{ひし}をめぐらし、角櫓^{すみやぐら}や天守閣と称する高層建築のある新様式の城郭にくらべてはもちろんのこと、古風な城郭でも、山や川や湖沼を利用した戦争の際の攻防を主目的としたものとも、まるで違う様式であつた。

「堅固な城などいらぬ。領民全部が一番大事じゃ。領

民が大名をありがたいご主^{しゅ}と思ひ、慕うてくれるかぎり、領内全部が要害無比の城となる。領民の心を失なえば、人皆敵にあらざるなしじゃ。どんなに堅固でも、城一つがなんの役に立つものぞ」

というのが、信玄の口ぐせであつた。

事実、信玄はこのなんの防備力もない居館にいて、領内よく治まり、領民悦服^{えつぷく}し、四隣に兵を出して、西は信州を切りとり、東は上州を略し、南は駿河をとり、遠州三河の一部分もその有とし、甲州の兵威は天下の人が話を聞いただけでも襟を正して戦慄^{せんりつ}するほどのものがあつた。

ところが、その信玄が死んで八年の間に、武田家の武威は急坂にまる石をまろばすようにおとろえた。東方と北方こそどうやら無事であるが、南は徳川家康の勢力が三河を回復し、遠州を奪い、駿々^{しんしん}として駿河を蚕食し、西は織田信長の力が美濃方面から圧迫を加えて来る。

こうなると、亡父のように高邁^{こうまい}なことは言っておられない。去年の七月から甲府の西北方十三キロの韭崎^{ぬいさき}からさらに釜無川に沿って西北四キロの地点を見立て

て新府城と名づくる要害堅固な城を築きはじめ、去年十二月引き移った。城は今もまだ完成せず、毎日数百人の民が賦役としてかり出されて働いているのである。一行は馬を進めて、現在甲府といっている地帯に入った。このあたりも当時の甲府の城下町の一部にはちがいないが、場末である。みすばらしい商家が、百姓家にまじって点々とある。そんな商家があるたびに、若い主人はひとみをすえて凝視し、さらにその前を通りすぎる時には、低く垂れ下った草ぶきのひさしの下から暗い奥をのぞくように見入った。

少し行つて、道が石和から新府に通ずる道と十字に交叉するところまで来た時、石和道の方から走つて来た者があつた。陣笠に小具足をつけた雑兵姿の男が二人である。二人とも、はだしで、青竹の杖をもつていた。飛ぶように走つて来て、さげんだ。

「馬をおり、かぶりものをとらっしゃい！ 馬の口綱を短くとり、かしこまっていさっしゃい！ 主人は立っていてもようござるが、ご家来衆はつくばっていないさる！ 尊いお方のお通りでござる！」

立てつづけに、叱りつけるようなことばだ。

見ると、小半町向うから、十数人の供侍を連れ、騎馬で来る人が三人あつた。三人とも、馬の背に美しいふとんをのせた上にのり、真白な被衣をかぶり、ゆつたりと馬を打たせて来る。供侍らは直垂すがたのもあり、小具足姿のもあるが、鉄砲をかついだり、弓矢を持ったり、槍をかついだりして、まことに嚴重ないでたちだ。自分にまで下馬せよというのは、お屋形のご一門の女性方であろうと、主人は思った。

おとなしく馬をおり、言われた通り綾蘭笠をとり、口綱を短くとして立つた。従者らも馬に乗つたのは馬を下り、皆陣笠をぬいでひざまずいて両手をついた。

そぎ尼

一

(ああ、美しい)

馬上三人のうち、真先きに立った人を見た時、武士は心から感嘆した。胸の最も奥深いところに、ずきりとなにものかが突きささったような衝撃があった。

雪のように真白な練絹ねりぎぬの被衣かつぎの襟えりの下もとの顔は、小さく細っそりとして、頸くびが長いようであった。血色はよいとはいえない。蒼白そうはくと思われるほど沈んだ色をしていたが、伏目がちの切れの長い目や、細くとおった鼻筋に、何ともいえず高雅な感じがあった。武士は深い谷間に人知れず咲いている真白な百合の花を連想した。

その人は馬をとめておじぎをしている武士らに、目をそそぎ、軽く会釈をくれて乗りすぎて行つた。その時、武士はその人の目が深い色に澄んでいたことと、

被衣の横から短く切った髪のはしが黒々とのぞいてゐることを、はっきりと見た。それは俗人ではなく、仏道に入つてそぎ尼になつてゐる人であることを示していた。

女人ら一行がはるかに行きすぎてから、武士らも騎乗して、予定の通り古府に向つたが、ふと望月が溜息ためいきをついて、誰にともなく言つた。

「どなたじゃろうな。お美しかったな」

「ほんにのう。どなたであらうな。ご一門の方にはちがいないが」

と江原が答えた。

「しかし、あつたらこと。そぎ尼であつたようじゃな」

「そうじゃつた。どなたであらうな」

「あつたらこと、あつたらこと」

望月はまたくりかえしている。溜息まじりに、痛嘆にたえないというような言い方であつたが、こんな感情を表現するには望月の声は明るくて気楽にすぎる。唄うたうようなものに聞こえた。

先頭に立っている武士には、あの女人がどんな素性

(あの方も、どうなるであらう……)

二

であるか、見当がついているが、従者らの話に入っては行かなかった。真直ぐに前方を見つめて、深い思案にしずんでいた。

(お気のどくなお身の上じゃ。戦国という時勢のいけにえになられたのじゃ)

と、胸のうちでくりかえしていた。

躑躅ガ崎城も、その周辺の武家屋敷も、荒廃しきつてゐる。城も屋敷も建物はあらかた新府に移したので、踏みあらされて芝生のはげた土居の内に半壊の建物が新しい木口を見せたりしているのが、何ともいえず悲惨な景色であった。ある屋敷では満開の梅が斜陽の中に咲いていた。住む人のいなくなったことも知らず、乱雑な周囲の中に最も清麗な色で咲きはこっているのが、一層悲慘で、人々は胸が熱くなるのを感じた。わずかに三月立つや立たずなのに、変れば変わるものであった。

(暗い、暗い、見通しは実に暗い)

と、武士は沈んだ胸でまた考えた。その胸の底に、白い被衣を着て、馬上に揺られて行った人のおもかげがある。

とつぷりと暮れてから、武士らは新府に帰りつき、真田安房守昌幸の屋敷に入った。この年若い武士は、昌幸の次男源次郎幸村であった。

新府の武家屋敷はどこもそうだが、この屋敷も広く土居をめぐらしてあるばかりで、建物は粗末で、端々はまだ出来上っていないかった。

幸村は居間の縁先に持って来られた水をはい、ぞうにくみ入れ、顔を洗い、はだぬぎになってからだをよく拭き、最後には足まで洗って、居間に入った。

着がえをしながら、手伝いの近習の少年に聞いた。

「今夜も父上はまだお帰りでないようだな」

「はい」

「兄上は？」

「源三郎様は殿様とご一緒に登城でございます」

幸村は着がえをしてしもうと、いつもすわる文机ふでぐしの前にすわった。

少年は幸村の脱ぎすてた着物をまとめて一かかえに

して去ったが、すぐ茶を持って来た。

幸村はとり上げて喫した。

午後になってそよぎ出した微風は、日が落ちるとびたりと落ちて、おだやかな春の宵になり、しっとりとした暗が庭をこめている。机の前においたともし灯があげはなした縁から外にさしているが、その灯影のあたるところ、縁先からつい七八尺の位置にたくましく枝のびた大きな野梅がある。びろうどのようにつややかな黒さを持つ暗を背景に、力一ぱいの筆勢で描き出したような強い勢いをもつてのびた枝とその上にびっしりとついた真白な花が、灯光の遠近にしたがつてさまざまに明暗をもつて、一幅の絵のように見えた。

この梅はここが畠地であつた頃からのものだ。畠と畠の間に、境界の目じるしとしてあつたのであろう。野梅ながらあまりに見事なので、真田家がここを邸地としてもらつた時、昌幸がのこしたのであつた。

幸村は茶を喫しおわり、まだぬくもりののこっている湯呑を膝の上でもてあそびながら、梅を凝視していたが、やがて自分の胸の底に今日見たそぎ尼の姫君の面影があれからずっとひそんでいることを感じた。

「暗いなあ、見通しは実に暗い」

と、またしてもつぶやいた。

夕食をおわって、今日遠乗りにも持って行った書物を読みついだ。

昌幸と長男の源三郎信幸（後、信之）の帰って来たのは、四つ（十時）を過ぎていた。

昌幸はこの時三十八、信幸は十七歳であつた。これは寛政重修諸家譜の記述によつて推算した年齢であるが、この書には幸村の生年の記述がない。そこで平凡社版の新選大人名辞典の真田幸村の項目を参照する。

これは高柳光寿博士の執筆だが、これには幸村も永禄九年の生まれとしてあるから、この時十七歳という勘定になる。しかも、寛政重修諸家譜によれば、母がちがつているわけでもない。共に昌幸の正室菊亭右大臣晴季の女の所生である。といつて、双生児として生まれたような話も古来聞くところがない。どこかに過誤があるのかも知れないが、二人の生まれたという永禄九年は八月に閏月があつて十三カ月ある。年のはじめに信幸が生まれ、年の暮に幸村が生まれたとすれば、兄弟同年であつても不思議はないわけである。こうし

たせんさくはこの小説ではしないことにしているが、あまり特異なことであるから、一応書いた。

昌幸は体格雄偉で、眼光するどく、しかもその目がいつも血走っていて、人相はあまりよくなかった人と伝えられている。その目で、迎えに出た次男をじろりと見て、

「やれやれ、くたびれたわ」

と言いながら、式台を上った。

信幸は父の佩刀はいとうを持って居間に行く父のあとからついて行こうとすると、昌幸は言った。

「源三郎は明日また早いじゃ。かまわぬから、退つてやすめ」

「は」

信幸は父の刀を幸村にわたし、それでは退らせていただきますとあいさつして、自分の居間に去った。

三

昌幸は着がえをして居間におちつくと、大きなあくびをして、じろりと幸村を見た。父に言いたいことがあって、幸村は下座しもざにすわっていたのである。

昌幸はこの二男が気に入っている。長男の信幸より気に入っている。よほどこちらの方が見込がある、こっちが先きに生まれてくれたのであったら、文句はなかったのじゃが、とまで思っている。もちろん、口に出して言ったことはない。軽々しくそんなことを口外してはどんなにまいましい結果が生ずるものであるかは、よく心得ている。

こんな風に気に入ってはいるが、やさしい態度で接したことは一度もない。彼は父親の男の子にたいする愛情は鍛練だんれん以外にはないと信じている。やわらかくやさしくはぐくんでやるのは母親のつとめであり、母親の愛情だ、男親の愛情は子供が世に立つて生きぬきのび上あがって行く力をつけてやるにあると思っている。すべての男が力かぎり押合いへし合いして伸び立のびたてて行くとうととめている世に、ひよわい根性の子供を送り出すことは、子供を殺すにひとしいと信じて疑わないのだ。だから、子供らが何か言いたがっているとわかっていても、決して彼の方から言いやすいように橋を架けてやったことがない。知らんふりで突ッばなしておくのだ。それを乗りこえていくところに鍛練と修業